

論文の内容の要旨

論文題目 A Comparative Study of Authorized English Textbooks for Junior High Schools
in Japan and China
(日中の中学校英語検定教科書の比較研究)

氏 名 王 林 鋒

検定教科書の作成過程は、国の学習指導要領の目標に準拠し学習内容が具体化されていく。しかし、これまで検定教科書の実態が学習指導要領の理念と一致しているかを批判的に議論することはなされてこなかった。また、これまでの英語教科書研究では、特定の教授法に依拠した評価分析、内容の計量分析が主に行われており、それらは第二言語習得理論に基づく手法である。日本と中国における英語教育は、日常生活で用いることを目的とする第二言語習得の文脈と異なり、外国語としての英語教育であるにも関わらずその区別がなされず、第二言語習得理論が外国語としての英語教科書を支配する危険性がある。本論文は、学習指導要領を具体化した日中の「英語検定教科書」分析を通じ、外国語としての英語教科書の特性を明らかにする。その上で、学習指導要領が如何に反映されるのかを解明するとともに、外国語としての英語教科書の共通課題を見出し、その課題を乗り越える新しいアプローチの可能性を提示することを目的とする。全3部7章からなる。

第1部は、第1章と第2章で構成される。本論文の研究背景、目的、研究課題、そして分析手法を提示した。第1章では、先行研究から教科書研究の重要性と英語教科書研究の動向を検討し、日本と中国の英語教科書の歴史的な展開を概観した。その上で、学習指導要領の教育観を整理し、本論文の目的と研究課題を提示した。上記の先行研究の検討により、外国語としての英語教科書（EFL）の特性、および外国語教育観による学習内容の差異に注目する研究が乏しいこ

とを明らかにし、新たな微視的な観点として学習単元の内容を検討する必要性を指摘した。また、両国において輸入英語教科書が優位的であった1800年代後半から、母国の文脈に合う独自の教科書開発時期を経て、高い教育効果をもたらす英語教科書の改善が求められ発展してきた共通性を見出した。さらに、英語学習に対する信念や志向性を表す「学校外国語教育観」を捉えるため、日本と中国の外国語学習指導要領の含意を検討した。外国語としての英語教育を行う両国は、ともに国際社会や新教育理念からの要請に応じて総合的言語能力を育成する目標が設定されていたが、内容と指導の取り扱いに異なる特徴が示されていた。

第2章では、学習指導要領の教育観が如何に教科書に反映されるのかを解明するために、英語教科書の分析に関する先行研究を概観し、学習単元における記述的分析枠組みを提示した。学習者と教科書の相互作用を捉え、学習単元を構成する三つの要素として、学習に関わる情報、本文内容、練習活動に分けた。それぞれに対して、第3章メタディスコース分析(Crismore, 1983)、第4章テキストの修辞パターン分析(Chambliss & Calfee, 1998)、第5章練習活動の内容分析(Nation, 2007; Littlejohn, 1992)を提案し、それらを取り入れた総合的な枠組みを構築した(図1)。2012年使用開始の日中英語検定教科書(日本6社、中国8社)において、中学校1年生の身近な事柄に関わる「学校」、「家族」、「行事」をテーマにした単元を一つずつ(合計42単元)抽出し分析対象とする。

	学習単元		
基本構成要素	学習に関わる情報	本文内容	練習活動
分析視点	教科書が学習者の学習をどのように支援するか	学習者にとってテキストがわかりやすいか	学習者がどのような練習活動を求められるか
分析手法	メタディスコース分析 (第3章)	修辞パターン分析 (第4章)	練習活動分析 (第5章)

図1:本論文における英語教科書の学習単元の記述的分析枠組み

第2部は、第3章、第4章と第5章で構成される。第1部で構築した枠組みを用いて教科書を分析した。第3章では、「学習に関わる情報」を、学習者に注意を喚起する機能をもつメタディスコースを分析の観点として用い教科書の学習支援の有り様を検討した。この分析によって、教科書がどのように学習者を英語学習へ導くのが明らかになる。メタディスコース分析に依拠し、分析カテゴリーは、単元目標の提示・内容文脈の導入・復習の設定・トピックの表示といった情報的内容、教科書の主張を示すような態度的内容、母語使用・人称視点・付録資料といった付加的内容に分類した。分析の結果、態度的なメタディスコースの不足と母語使用において共通の課題が見られた。学習者の意見産出を促す態度的なメタディスコースの不足が、批判的思考力に影響を与える懸念を示した。母語の使用に関しては、日本は、指示や説明に留まり、中

国は、母語を排除する傾向が見られた。母語は、言語力の育成においてメタ言語能力を育む言語学習の材料となるものである。両国共に、母語と外国語を連携する視点が欠如していることを指摘した。また、日本は、学習内容の文脈を解説することに重きを置くとともに、第1人称（～してみよう）で、母語で指示するなど学習者への情動的支援の配慮を特徴とする。中国は、学習目標を明確にし、第2人称（～してください）で、英語で指示するなど学習者の動機づけ向上への意図を特徴としていることが明らかになった。

第4章では、単元の「本文内容」を、単元全体の構造の中で各パーツ間の関係性を修辞パターン分析によって、外国語としての英語教科書テキストの展開とテキストの内容構成の特徴を検討した。分析単位として同じ単元内の各パーツのテキストを意味的に一つのまとまりと見なし、各パーツ間の展開とつながりを表す修辞パターンを分類した。その結果、両国において、パーツ間の関連性が最も薄い「羅列パターン」の使用が大半を占めたことが明らかになった。羅列パターンでデザインされたテキストの特徴は、各パーツが内容上の一貫性あるいは結束性でつながるのではなく、言語が使用される場面や働きといった単元の学習目標となる実用性を強調する言語機能、あるいは文法を中心としたデザインをテキストに詰め込んでいることが明らかとなった。そのため、主題と外れた内容が生じ、単元としての一体性がなくなることで、各パーツのつながりが低くなり、本文内容自体の魅力を失うことにつながる。一方、緊密な関連を示す階層型パターンとマトリックスパターンが少ない理由は、学習内容として単語と文構造が限られており、関連性を持つ外国語学習用のテキストの編成が困難であることと考えられる。

第5章では、言語学習を目的とした「練習活動」を、内容分析によって学習者に求めている力を明らかにした。五つの視点、1) 学習者の主体性、2) 言語的要素、3) 知的操作、4) 学習者同士の相互作用、5) インプット・アウトプットの内容・形式に基づき、分析を行った。その結果、1) 学習者の主体性においては、両国ともに学習者が自ら発することではなく、指定された文型で回答を求める傾向が見られた。特に日本は、「聴く」「見る」のように回答を求めない受動的練習問題が4割を占めた。2) 言語的要素に関しては、両国ともに「意味」と「言語システムと意味の関連性」に焦点を当てる活動が中心であった。中国は、言語システムに焦点を当てた活動が日本より多いことが明確になった。3) 練習活動を行う際に伴う知的操作のうちで、「意味解読」、「情報選択」が両国において高い割合を占めた。出版社によって、知的操作の多様性と頻度のばらつきが見られた。4) 学習者同士の相互作用に関しては、聴解や読解のような個人作業が圧倒的に多いのに対して、対話練習のようなペアやグループによってコミュニケーションを行う活動が少ないことが示された。5) インプット・アウトプットの内容と形式については、両国ともに視覚情報、書き言葉と話し言葉、架空情景の使用といった共通点が多いものの、言語項目、言語表現の長さ、到達レベルに異なる特徴が明らかとなった。

第3部の第6章では、第3、4、5章の教科書分析の結果を踏まえ、教科書が学習者に身につけさせようとする資質・能力が、学習指導要領の内容と一致するかどうかを考察し、外国語としての英語教科書の特性と問題点を検討した。その結果、まず、教科書の実態を示すエビデンスと学習指導要領の内容が一致していないことから、教科書と学習指導要領との乖離が証明された。また、外国語としての英語教科書の共通課題として、母語と外国語の効果的な運用につながるメタ言語能力を育成する視点の欠如が問題点として挙げられた。次に、ことばへの気づきを含め、メタ言語能力を育成するため、国語と外国語を有機的に関連づける教材開発の必要性を提示した。そして、教材開発における母語と外国語が連携するアプローチの実証的検討を行った上で、英語教科書の共通課題を解決する一つの可能性を提起した。

第7章では、本論文の意義と示唆、そして残された課題を示した。意義及び示唆として、1)日中比較を通して外国語としての英語教科書の特性を明らかにしたこと、2)教科書の実態から学習指導要領との乖離を導き出したこと、3)課題であるメタ言語能力を育成する視点を教材開発に取り入れるため、ことばの教育を目指す国語科と英語科の連携が重要になることを示した。残された課題として、本論文は、日本と中国以外の国や地域を取り上げておらず、また、過去の教科書との関連を検討していない。今後は対象国の拡大と歴史的な変遷を取り入れた調査分析を行い、外国語教科書の特性研究を発展させていくとともに、母語と連携する教材開発及び実践研究を行いたい。